慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスの中国・インド論
Sub Title	The study on China and India by Adam Smith
Author	小池, 基之
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.6 (1976. 8) ,p.379(13)- 401(35)
JaLC DOI	10.14991/001.19760801-0013
Abstract	
Notes	『国富論』刊行200年記念特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760801-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アダム・スミスの中国・インド論

小池　基之

1. 問題の提示・「先行的蓄積」と資本蓄積
2. 停滞のメカニズム
(1) 富裕と停滞
(2) 土地制度
(3) 外国貿易
3. 衰退の論理

1. 問題の提示・「先行的蓄積」と資本蓄積

〔I〕 周知のごとく，アダム・スミスはその「富国論」第1編第8章において，国民経済の現状をその展望とかかわらせて，三つの類型に分類している。まず北アメリカ，イングランドを「最も盛大な，最も迅速に富みつつある (much more thriving, and advancing with much greater rapidity to the further acquisition of riches) 国々としてあげたのち (Wealth of Nations, vol. 1, p. 87. 〈大内兵衛・松川七郎訳「諸国民の富」(キャナン版)・岩波文庫・第1分冊231頁〉)[1]，それにつづいて，停滞的な国として中国を，衰退しつつある国としてインドをあげている。「シナはながい間世界きっての富国，すなわちもっとも多産的で，もっともよく耕作され，もっとも勤勉で，またもっとも人口の多い国の一つであった。けれども，この国はながい間停滞的 (stationary) であったように思われる。マルコ・ポウロ (Marco Polo) は500年以上も前にこの国を訪れたのであるが，現在の旅行者たちが記述しているのとほとんど同一の言葉遣いで，その耕作・産業および人口稠密について記述している。おそらくはかれの時代よりずっと以前に，この国の諸法律や諸制度の性質上獲得しうるかぎりの富の全量が，あますところなく獲得されていたのであろう。」(ibid., p. 89. 〈同上邦訳 235頁〉)[2]。「とはいえ，たとえシナは静止しているかもしれないにしても，後退しているとは思われない。」(ibid., p. 90.

注(1) 「国富論」からの引用は，Adam Smith; An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner, textual editor W. B. Todd. (The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, II.) 2 vols. Oxford, 1976 による。
(2) また ibid., vol. 1, p. 111. (同上邦訳第1分冊282頁) をも参照。

〈同上238頁〉)。これに対して，東インドのベンゴールは「衰退しつつある」(decaying) 国である。「上流の諸階級で育成された多くの人々は，自分の階級の業務では仕事を見出せないから最下級の階級の業務のなかでもよろこんでそれをさがすようになるであろう。この最下層の階級も，それ自体の職人ばかりではなく，他のすべての階級からあふれでてきた職人で供給過剰なのであるから，そこでは仕事をもとめる競争が非常に激しくなり，労働の賃金を労働者のもっともみじめで乏しい生活資料にまでひきさげてしまうであろう。多くの人はこういうつらい条件でさえも仕事を見出せず，餓死するか，さもなければかりたてられて乞食になり，またおそらくは極悪無道の犯行をあえてしてまでも，生活資料をさがすようになるであろう。」スミスは衰退しつつある国の状態をこのようにえがき出しているのである。「困窮・飢餓および死亡がたちまちのうちにその階級を風靡し，さらにそこからすべての上流階級にひろがり，とうとうその国の住民数は，そこに残存する収入や資財によってたやすく扶養しうる程度にまで縮減してしまうであろう。しかもこの収入や資源でさえ，爾余のものを破滅させた暴虐や災難をのがれてなおそこに残存していたものなのである。これが，おそらくは東インドのベンゴールおよび他の二，三のイングランドの定住地の現状に近いものであろう。」(ibid., pp. 90・91.〈同上238・239頁〉)。

これらの国々の現状を，進歩・停滞・衰退とする根拠は，勤労 (industry) を維持するにむけられた基金が増加しつつあるか，不変であるか，あるいは減少にむかいつつあるかにおかれている。ただ，スミスが「賃銀によって生活する人々」とするもののなかには，「労働者 (labourer)・渡り職人 (journeyman)・あらゆる種類の使用人 (servant)」すなわち，資本と交換される労働とならんで，収入によって交換される労働も，含まれているのであって，この点は留意すべきであろう。そのうえで，スミスは，ある国の繁栄について語る場合，その「決定的な指標」としてその「住民数の増加」をあげるのであるが (ibid., pp. 87-88.〈同上233頁〉)[3]，それは労働者が自分およびその家族を扶養するために十分である以上の賃銀を獲得しているということの結果であり，そして労働者に高賃銀をもたらすものは，労働者に対する需要，つまりかれらを扶養するにむけられた基金が，使用さるべき労働者を見出すよりも一層すみやかに増加するということによるものとされるからである。たとえ一国の富がきわめて大であったとしても，したがって賃銀を支払うためにあてられた基金は大きいとしても，もしこの基金がひきつづき同一の大きさに止まっていたとしたら，人手はその雇用をこえて自然に増殖するであろうから，毎年必要とされる労働者数は容易に充足しうるのみならず，むしろ仕事がたえず払底するようになり，かくてそこでの賃銀が，労働者を十分に扶養し，またかれらが家族を十分に養育しうる以上のものであったにしても，競争の結果は，やがてはそれを「普通の人間性に適う最低の率」(ibid., p. 89, p. 91.〈同上235頁，240頁〉) まで引き下げてしまうことに

注(3)「それゆえ，労働のゆたかな報酬が富の結果であるように，それは人口の増加の原因である。」(ibid., p. 99.〈同上254頁〉)。

なるであろう。そして勤労を維持するにむけられた基金がきわ立って減衰している国では，労働者に対する毎年の需要は減退せざるをえない。

かくて，国富の実際の大いさではなくして，その不断の増加こそが，高賃銀をもたらすところのものであり，「労働の報酬がゆたかだということは，国富が現に増加していることの必然的結果であると同時に，その自然的徴候でもある。他方，労働貧民の生活資料が乏しいということは，事態が行き詰っているということの自然的徴候であり，また労働貧民が餓死的状態におかれているということは，事態が現に迅速に後退しつつあるということの自然的徴候である。」(ibid., p. 91. 〈同上239-240頁〉)。

スミスが国々の，進歩・停滞・衰退を対比せしめて，論じたのは，国富の増進，資本蓄積の増大と，高賃銀・低物価とをかかわらせて(4)，外国貿易における優位性の根拠として低賃銀・低物価を主張する重商主義批判の一論拠たらしめたこと，また労働人口の高所得は社会にとっても有利であることを主張するものである(5)ことは，うたがいのないところである。

しかしながら，スミスにおける進歩・停滞・衰退という類型検出の意義は，以上に止まるものではないように思われる。それは一つにはこれら進歩・停滞・衰退の諸類型を詳細に分析することによって，国富増進の条件を，したがって資本蓄積の条件を，単にヨーロッパの歴史的階級についてのみならず，世界史における諸類型について，あきらかにしようと意図したものであると考えていいであろう。それは，イギリス資本の形成・展開にあたって，それが見出したアジア諸地域の現状に触発されたものであるにはちがいないであろう(6)が，そこにスミスが見出したものはアジア諸地域

注(4)「労働の賃銀の増加は，価格のなかで賃銀にそれ自体を分解する部分を増加させることによって，多くの価格を必然的に増進させ，またそのかぎりにおいて，諸商品の国内と国外との双方における消費を減少させる傾向がある。とはいえ，労働の賃銀をひきあげるのと同一の原因，つまり資財の増加は，労働の生産諸力を増進させ，比較的少量の労働で比較的多量の所産を生産させる傾向がある。」そして，このような事情は分業（マニュファクチュア内の分業および社会的分業）を発展させ，「それゆえ，こういう改善の結果として，多くの商品が従来よりもはるかに僅かの労働によって生産されるようになるから，労働の価格の増進はその量の減少によってつぐなわれてなおあまりあるほどになるのである。」(ibid., p. 104. 〈同上，264-265頁。〉また p. 260. (同上，第2分冊205頁)。更に，スミスは，第5編第1章第3節で，インド市場における東インド会社をめぐる競争に関連して，こういう競争のためインド市場における財貨の価格が大いにひきあげられたとなす説は疑問であるとして，つぎのような指摘をおこなっている。「需要の増加は生産を奨励し，ひいては生産者たちの競争を増進させるのであって，かれらは互いに他を売りたたくために，さもない場合には思いもよらぬような新しい分業や新しい技術の改善にたよるのである。」(ibid., vol. 2, p. 748. 〈同上第4分冊104頁〉)。

(5)「さまざまの種類の使用人・労働者および職人 (servants, labourers and workmen) は，あらゆる大きな政治社会 (political society) の大部分を組織している。この大部分のものの境遇を改善することが，その全体に対して不都合だとみなされようはずは断じてない。成員のはるか大部分が貧しく，みじめであるのに，その社会が隆盛であり，幸福であるはずは断じてない。そればかりでなく，人民全体を食べさせ，着せ，そして住わせる人々が，自分自身もまたかなり十分に食べたり，着たり，そして住んだりしうるだけの，自分自身の労働の生産物の分け前にあずかるということは，まったく公正 (equity) というほかはないのである。」(ibid., vol. 1. 96. 〈同上第1分冊249頁〉)。

(6) スミスのアジア諸地域に関する関心は，その蔵書のなかに含まれる数多くの旅行記乃至は研究書にうかがかれるところである。東京大学経済学部所蔵の「アダム・スミス文庫」には，Jean Baptise Bourguignon d'Anville; Antiquité géographique de l'Inde, et de plusieurs autres contrées de la Haute Asie, Paris, 1775. John Bell; Travels from St. Petersburg in Russia, to diverse parts of Asia, 2 vols., Glasgow, 1763. (予約出版のこの書の予約者名簿にはス↗

の「停滞・衰退」の現状であったのであって，その分析を顧みることなくしては，スミス体系の全き把握は期待しがたいといわねばならない。

〔II〕 しかしながら，ここに問題がないわけではない。スミスが進歩・停滞・衰退という類型についてものがたるとき，それは資本の蓄積にともなう所得配分における労働者の取分にかかわるものであったことは，さきの引用にあきらかなところである。もしそうであるとするならば，そこでは資本家社会が，資本＝賃労働関係が前提とされており，その限りで，厳密な意味での資本と，その蓄積機構のなかで問題は展開されているものということなるであろうが，果してそうであろうか。

周知のごとく，スミスはかれの分析の対象とする社会を「商業社会」(commercial society) と規定している (ibid., p. 37. 〈同上133頁〉)。すなわち「一たん分業が徹底して確立されると，人間が自分自身の労働の生産物によって充足しうるところは，そのもろもろの欲望のなかのごく小さい一部分にすぎないものとなる。かれは自分自身の労働の生産物の余剰部分のなかで，自分の消費をこえてあまりあるものを，他の人々の労働の生産物のなかで，自分が必要とするような部分と交換することによって，そのもろもろの欲望のはるか大部分を充足する。こうして，あらゆる人々は，交換することによって生活し，つまりある程度商人になり，また社会そのものも，適切にいえば一つの商業社会に成長するのである。」ここでは，農工の分離を端緒とする社会的分業の普遍的な展開のうえに，すべての人が生産者でありかつまた商人であるような社会として，それは設定されているのである。

他方で，スミスにあっては「文明社会」(civilized society) という概念が，社会的分業の展開する当面の社会を表現するものとして用いられるが，「国富論」第1編第2章における，「文明社会では，どのようなときでも，人間は無数の人々の協働や援助を必要とする，」といった説明 (ibid., p. 26. 〈同上118頁〉)，あるいは「国富論草稿」における数多くの「文明社会」に関する言及からは，(7) その

↘ ミスの名が記載されているということである，) John Harris; Navigantium atque itinerantium bibliotheca. Or, A complete collection of voyages and travels. Consisting of above six hundred of the most authentic writers, 2 vols., London, 1764. Barthélemy d'Herbelot de Molainville; Bibliothèque orientale, ou Dictionnaire universel, contonant généralement tout ce qui regarde la connoissance des peuples de l'Orient……Maestricht, 1776. Robert Orme; A history of the military transactions of the British nation in Indostan, from the year 1745, to which is prefixed a dissertation on the establishments made by Mohamedan conquerrors in Indostan, 2nd ed. 2 vols., London, 1775-78. その他がみられ，また同じく「スミス文庫」に含まれている A Catalogue of Books belonging to Adam Smith Esqr. 1781. からは，以上のほかに Memoire sur l'Egypte Ancienne et Moderne, par d'Anville. Verelst's View of the Rise, Progress, & Present State of the English Government in Bengal. Bolt's Considerations on the present State of Bengal & its Dependances [sic]. Voyages du Chevalier Chardin en Perse et Autres Lieux de l'Orient, 4 Toms. Histoire Philosophique et Politique des Indes, 3 Toms. Holwell's India Tracts. Memoire sur la Chine par d'Anville. Voyages De François Bernier, Contenant la Description des Etats du Grand Mogol etc. 2 Toms. Relation du Voyage fait En Egypte par Le Sieur Granger, En L'année 1730. Recherches Philosophiques sur les Egyptiens et les Chinois, par M.P. 2 Toms. Recherches sur L'origine du Despotisme Oriental. 等を拾いだすことができる。またフランソア・ケネーの「シナの専制政治」(Despotisme de la Chine) が載った Ephemérides du Citoyen ou Bibliothéque Raisonner des Sciences Morales et Politique (Mars à Juin 1767) も右の Catalogue にみられるところである。

注(7) 「多くの人々の援助と協力がなければ文明社会におけるもっとも卑しい人々も，かれらが普通にくらしているような生活様式を自分のものとすることができない。」(An Early Draft of Part of The Wealth of Nations (c. 1763).↗

内容についての明確な規定はえられない。そこでは，せいぜい，社会的分業のうえに成立する社会といいうるには止まる。そしてそれは，「国富論草稿」において，「文明社会」における分業による労働生産性の上昇の説明につづいて「このようにして，富裕で商業的な社会 (opulent and commercial society) においては，労働は高価となり製品は安価となる」とのべている[(8)]としても，そこから「文明社会」を，まず独立生産者の社会として設定された「商業社会」と，直ちに等置するわけにはいかないように思われる。

スミスは「国富論草稿」において「文明社会」を「野蛮な孤立した国」(savage and solitary state) と対置している[(9)]のであるが，それにしたがって「国富論」における「初期未開の社会」(early and rude state of society) に対置さるべきものとして「文明社会」をおいたとしても，スミスにおける「未開社会」には二重の意味が与えられているように思われる。第1編第5・6章の展開，すなわち価値・価格論に関するかぎりにおいてみれば，「初期未開の社会」は「資財の蓄積 (accumulation of stock) と土地の占有 (appropriation of land) との双方に先行する」(ibid., p. 65. 〈同上185頁〉) ものとして，「資材が特定の人々の手に蓄積され，」「土地がすべて私有財産 (private property) となる」(ibid., p. 65. 〈同上186頁〉, p. 67. 〈同上189頁〉) 社会に，対置されているのであって，この点からすれば，——現実の歴史的発展にもとづいた抽象であるにしても——前者は独立生産者によって担われる単純商品生産社会であり，後者は資本家的範疇としての労賃・利潤・地代の成立のうえに展開される資本家的商品生産社会であるということになるであろう。これに対して，第2編において設定されるのは，「分業というものが全然なく，交換もめったにおこなわれず，あらゆる人が独力であらゆる物を調達している，未開状態の社会」である。ここでは「未開社会」はあきらかに単純商品生産社会ではない。そして，これに対して，分業がくまなく導入される社会が対置される。そこでは「一たん分業が徹底して導入されると，ある一人の人間の自分自身の労働の生産物は，かれのそのときどきの諸々の欲望の極く小さい部分を充足しうるにすぎない。諸々の欲望の圧倒的大部分は，かれが自分自身の生産物で，またはこれと同一のことであるが，その生産物の価格で購買するところの，他の人々の労働の生産物によって充足される。」(ibid., p. 276. 〈同上第2分冊231-232頁〉)。ここで「未開社会」にいわゆる「文明社会」が対置されるとすれば，そこにのべられているところは「商業社会」についてのべられているものとほぼ同一であり，したがって，ここでは「文明社会」

N. 1. W.R. Scott; Adam Smith as Student and Professor, Glasgow, 1937, p. 325. 〈水田洋訳「国富論草稿」(世界古典文庫) 37-38頁〉)。「分業によって，各個人は仕事の特殊な一部門のみに自己を局限するのであるが，文明社会に生じ，かつ財産の不平等にもかかわらず，社会の最下層の人々にまでゆきわたる，高度の富裕を説明しうるのは，この分業だけである。」(ibid., N. 2. Scott; p. 328. 〈同上邦訳53頁〉)。「われわれは，こうして交換によって，自分たちに必要なこれらの相互の世話の大部分を，たがいに人から受けるのであるが，それと同様に文明社会の全富裕の基礎となる分業を，はじめて発生させるものもまた，この同じ交換性向である。」(ibid., N. 6. Scott; pp. 340-341. 〈同上邦訳88頁〉) 等々。

注(8) ibid., N. 3. Scott; p. 332. (同上邦訳63頁。)

(9) ibid., N. 1. Scott; pp. 325-326. (同上邦訳46頁。)

は「商業社会」の概念によって，その内容があたえられているといっていいであろう。

ところで，スミスは，上につづいて，つぎのような指摘をおこなうのである。「けれども，この購買は，かれ自身の労働の生産物が完成されるばかりか，売られてしまってはじめておこなうことができるのである。それゆえ，すくなくともこういう二つのことが双方ともなしとげられるときまで，かれを扶養し，かれにその仕事の材料や道具類を供給するに足りるさまざまの種類の財貨の貯量（stock）がどこかに貯えられていなければならない。織工が自分の特殊の業務に専念できるのは，自分の織物が完成されるばかりか，売られてしまうまでのあいだ自分を扶養し，その仕事の材料や道具類を供給するにたりる資財（stock）が，自分の所有としてであれ，他のある人のそれとしてであれ，あらかじめどこかに貯えられているばあいだけである。明らかにこの蓄積（accumulation）はかれが非常にながい間このような特殊の業務に自分の勤労を充用するに充行して（previous）いなければならないのである。」「資財（stock）の蓄積は事物の性質上分業に先行せざるをえないから，労働もまた資財が前もって蓄積されることが多くなるのにのみ比例して，労働もますます細分されうるのである。」（ibid., pp. 276-277.〈同上 231-232 頁〉）。「資財の蓄積は労働生産力のこういう大改善をおこなうためにあらかじめ必要である。」（ibid., p. 277.〈同上 233 頁〉）。すなわちスミスがここで「未開社会」に対置せしめた「文明社会」＝「商業社会」においてはすでに資財の蓄積が前提されていなければならなかった。そしてその資財（stock）の一部が上のようにつかわれた場合には，スミスによってそれは資本（capital）と定義されるのである。（ibid., p. 279.〈同上 235 頁〉）。

ところで，すでにあきらかなように，ここに示された事例にしたがえば，独立生産者たる「織工」は「資本」をあらかじめ蓄積していなければならないということであった。それはなんら賃労働者を設定することなくして，規定された概念であり，したがってここには利潤範疇は成立しうべくもない。元来「商業社会」そのものが，その本来の性質よりして，独立生産者の社会として設定されたところのものであったのである。もっとも，スミスにしたがえば，それは純粋に独立生産者だけによって構成されている社会というのではない。資財の蓄積は労働の生産諸力の改善のためにあらかじめ必要とされているのであるから，それは自然にその改善に導くであろうし，したがって「労働を維持するために自分の資財を使用している人は，必然に，できるだけ多量の製品を生産するような仕方でそれをを使用することを欲する。それゆえ，かれは，職人たちの間に仕事がもっとも適切に配分されるように努めると同時に，自分が発明したり購買したりすることのできる最優秀の機械類をかれらにあてがうようにつとめる。この双方の点におけるかれの能力は，一般にかれの資財の大きさ，またはこの資財が使用しうる人々の数に比例する。」（ibid., p. 277.〈同上 233 頁〉）[(10)]。すなわちここでは資財（資本）の所有者は，次第に賃労働者を雇用するマニュファクチュア主となって立

注(10)　また Wealth of Nations, vol. 1. p. 86.（前掲邦訳第1分冊 230 頁）をも参照。そして「商業社会」はさきにあげた資本家的商品生産社会たる「文明社会」と重なりあうことによって，それ自体資本家社会への展望を内含する。

ちあらわれているのである。このようにして，スミスにあっては，資本＝賃労働関係を必ずしも前提としない「資本」範疇の設定のもとで，「文明社会」＝「商業社会」を「未開社会」と——すくなくとも理論的な構想としては——直接に対置するという仕方で，社会的分業の進展にともなう資本形成の過程，貨幣や商品の資本への転化の条件＝いわゆる「先行的蓄積」（„previous accumulation"）[(11)]の過程は，すでに前提されたものとして，実は本原的蓄積と資本蓄積とが重ね合わされてしまうのである。

〔III〕 ところで，スミスが分析の対象として理論的・抽象的に——したがって直接的に——「未開社会」と対置した「文明社会」＝「商業社会」は，スミスが「国富論」第3編において展開し分析した諸過程と，どのように対応するものなのであろうか。それは「商業社会」における独立生産者の手に「先行して」蓄積されていなければならないとされる「資本」について幾分の理解をあたえることになるであろうし，また諸国民の「進歩・停滞・衰退」と「資本」蓄積とのかかわり合いについても，より一層，具体的な，厳密な理解をあたえることになるであろうと思われるのである。

スミスはまずゲルマン民族やシシア民族（German and Scythian nations）の侵略にもとづく「貧困と野蛮」の支配のなかから，大土地所有が形成されてくることを以て，ヨーロッパ社会の起点とする（ibid., pp. 380-381.〈同上428頁〉）。そこでの支配体制における権力の基礎であった（ibid., p. 415.〈同上480頁〉）このような大土地所有を変質・解体させていく要因として，スミスがあげるところは外国貿易と製造業である。「封建的諸制度のもとであらゆる暴力をあげてもなしえなかったことを，外国貿易や製造業という黙々として気づかれない事業が次第になしとげた。外国貿易や製造業は，次第に大土地所有者達に，かれらが自分達の土地の全余剰生産物と交換することができ，しかもそれを借地人や従者のいずれとも分けあうことなく，自分自身で消費できるような，なにものかを供給した。一切は自分達のためのものであり，他の人々のためのものなどは一物もないということは，世界のあらゆる時代における人類の支配者達の下劣な金言であったように思われる。」（ibid., p. 418.〈同上483-484頁〉）。このような商業や製造業の拠点となったのは，いうまでもなく，領主制のもとで次第に「自由と個人の安全」（ibid., p. 405.〈同上464頁〉）を確立するにいたった都市であるが，それはかならずしも直ちに，社会的分業の展開，国内市場の拡大に資するものとはならないのであって，[(12)]

注(11) Karl Marx; Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie. Volksausgabe, besorgt vom M-E-L-Institut, Bd. 1. Moskau, 1932, S. 751. なおこの点に関しては，「小林昇経済学史著作集」I（国富論研究1）246頁以下に，先駆的な言及がなされている。しかし本文に明らかなように，論点は多少異なる。

(12) 「ある都市の住民が，その生活資料や，その産業の原料および手段を究極的にはつねに田舎から引き出さなければならない，ということは真実である。けれども，海岸または航行可能な河川の沿岸のいずれかにある都市の住民は，それらのものを必ずしも近隣の田舎から引き出さなければならないとはかぎらない。かれらははるか広大な活動区域をもっているから，自分たちの産業の製造品と交換するか，または遠方にある国々の間の仲立人としての役目を果しながら，ある国の生産物を別の国のそれと交換するかのいずれかすることによって，世界の果てからそれらのものをとってくることができる。かくして，ある都市はその近隣の田舎ばかりでなく，それと取引するすべての国々が貧しくみじめな状態におかれているのに，巨大な富と華美とをえたであろう。（Wealth of Nations, vol. 1, p. 405.〈前掲邦訳第2分冊465-466頁〉）。

多くの商業都市の住民は，まず，「いっそう富裕な国々の改善された製造品や奢侈品を輸入することによって，自分自身の土地の多量の粗生産物でこれらのものを購買することを熱望していた大土地所有者達の虚栄心をかなりの程度に満足させた」（ibid., pp. 406-407.〈同上467頁〉）のである。

けれども，それにともなって，一方では，製造業の発達が促進される。すなわち「大国であれば，その国内には必ずある種の製造業が営まれていたし，またそれがないかぎりその国は存続できるものではない」のであるが，外国貿易は，「いっそう精巧で改善された製造品に対する好みを，またこのようなものの製作を全然おこなったことのない国々に導入した。」（ibid., p. 407.〈同上468頁〉）。同時に他方では，外国貿易を通じて必至とされた大土地所有者の個人的経費の増大は，大土地所有者のもとで，その余剰生産物によって扶養されていた多数の従者や隷属的土地占有者の「不用な部分」の解雇を余儀なくしたが（ibid., p. 420.〈同上486-487頁〉），それはまた，大土地所有者の，農地の拡張，これまでよりも大きな余剰を獲得し」ようとする意図が，借地人に対してやむなく長期の借地奨約を容認せざるをえないような仕方で遂行されたことによって，[13] 借地人達に独立への途を開くものであったのである。

このような借地人の独立，独立自営農民の形成をささえるものとしての，「個人の自由と安全」は，都市における商業と製造業のもたらしたところのものであった。スミスはこの役割をきわめて高く評価してつぎのようにのべるのである。「商業と製造業とは，それ以前には隣人に対するほとんど間断なき戦争状態と上層の者に対するほとんど間断なき奴隷的従属状態とのもとに生活してきた田舎の住民の間に，次第に秩序と善政とを，またそれにともなって個人の自由と安全とを導入した。このことは，ほとんど注意されなかったけれども，商業と製造業との一切の成果のなかではるか最大のものである。私が知るかぎりでは，従来このことに注目を払ったのはヒューム氏だけである。」（ibid.,p. 412.〈同上476頁〉）。

このような耕作者の独立，そして耕作や改良の進歩は，食糧品を潤沢に，安価にし，多数の職人の定住を促進することによって，また耕作者の必要とする便益品を安価に購買しうるようにする。「こうして，耕作者達は，その土地を更に改良し，よりよく耕作することによって，この剰余生産物の増加を奨励もされれば可能にもされ，土地の多産性が製造業を生みだしたのと同じように，こんどは製造業の進歩が土地に反作用し，その多産性をさおさら増進させる。製造業者達は，はじめのうちはその近隣を充足し，その後自分達の製品が改善され精巧化されるにつれて，より遠方の諸市場を充足する。」（ibid., p. 409.〈同上472頁〉）。いわゆる「農業の子孫」としての製造業である。

注(13)　大土地所有者は「自分の土地の地代を，その改良の実状がゆるす限度以上に引き上げることを熱望した。かれの借地人たちは，自分たちの占有が保証される期間を十分に延長し，その間に土地をさらに一層改良するためにたとえどれほどのものが投じられようとも，利潤とともに，それを回復しうるほどの期間にするということを唯一の条件にして，これに同意することができた。」（ibid., p. 421.〈同上487頁〉）。この点については第3編第2章とくに pp. 391 以下（同上442頁以下）に詳細に論じられている。

そしてスミスは，このような「製造業の拡張や改良は，外国貿易とそれによって直接に導入された製造業との最後にして最大の成果としての，農業の拡張や改善の結果としてでなければおこなわれえなかったものなのである」(ibid., p. 410.〈同上 473 頁〉) とのべるのである。しかも，このような変革は大土地所有者や商人の意識的な行動によってもたらされたものではない。「公共社会の幸福にとって最大の重要性をもつ一つの変革が，公共社会に奉仕しようという意図などすこしもない二つの違った階級の人々によってもたらされたのである。すなわち，もっとも子供じみた虚栄心を満足させるということが，大土地所有者達の唯一の動機であった。また商人や工匠たちにしても，その莫迦さ加減こそはるかにこれに劣るが，ただ単に自分自身の利益のために行動したにすぎないし，またその場合，1ペニーでも獲得できるところなら1ペニーでも回転させてみせるという行商人根性 (pedlar principle) を追求して行動したにすぎない。かれらはいずれも，前者の愚行と後者の勤勉とが次第にもたらしつつあった大変革について，知識もなければ予見もなかったのである。」(ibid., p. 422.〈同上 490 頁〉)。ここでは旧貴族的大土地所有と前期的商人資本にみられる人間的性格と，近代的社会の担い手としての独立生産者のそれに対してもつスミスの感情の一端をうかがいうるように思われる。

このようにみてくるならば，スミスにおいては，社会的分業の発展にもとづく国内市場の形成と展開は，以上のような「農業の子孫としての製造業」の形成，そしてそれに互いに見あうものとして設定される，耕作および改良の進歩の担当者としての，独立自営農民の形成のうえに，はじめて，可能とされるところなのであって，これこそが，スミスの「分業が徹底して確立される」となすところのものであったというべきあろう。

もしもそうであるとするならば，スミスのいわゆる「先行して」なされなければならない蓄積は，その過程のうちに，封建家臣国の解体や隷属農民の土地からの駆逐といった本源的蓄積を含みながらも，同時に厳密な意味における本源的蓄積そのものではない。(14) そして，スミスの時代はなお産業革命は進行中であったのである。

このような論点を前提として，当面の，「停滞」乃至は「衰退」の問題を考えてみるならば，それをスミスは「国富論」第1編第8章で資本蓄積一般のなかで問題としているとはいえ，それは単に資本蓄積一般の問題としてではなく，旧 (封建的) 大土地所有の解体，前期的諸資本のもとでの資

注(14) 「インド人民の最大の部分は自営農民だから，かれらの生産物，かれらの労働手段や生活手段も，けっして『他人の収入から貯蓄される (saved from Revenue)，したがって先行の蓄積過程 (a previous process of accumulation) を通過した財源 (Fond) の形では』存在しない。他方イギリスの支配による古い体制の解体が最も少なかった地方の非農業労働者は，直接に豪族によって使用され，これらの豪族の手には農村の剰余生産物の一部分が貢租や地代として流入する。この生産物の一部分は豪族によって現物形態で消費され，別の一部分は豪族のために労働者の手で奢侈手段やその他の消費手段に転化され，その残りは，自分の労働用具の所有者である労働者の賃銀になる。生産も拡大された規模での再生産も，ここではあの奇妙な聖者の，あの悲しい姿の騎士の，『禁欲する』資本家の，一切の介在なしに進行するのである。」(K. Marx; a.a.O. Bd. 1, SS. 628-629)。

本蓄積，独立自営農民層の形成，農村工業の展開等々，つまり「先行して」いなければならない蓄積過程の問題を含むものとして，むしろその過程のなかにおいて，——それは当然それにつづく資本蓄積過程を規定する，——いいかえれば，世界史的視野において，「資本蓄積」の諸段階と諸類型を考察しようとするものであったように思われる。(15)

2. 停滞のメカニズム

(1) 富裕と停滞

スミスにしたがえば，停滞性をもっとも直截に示すものは，低位の賃銀と高率の利潤乃至は利子であった。(ibid., p. 111, p. 112.〈同上第1分冊280頁，283頁〉)(16)。そしてそれはさきに述べたところからもあきらかなごとく，資本的資財 (capital stock)，乃至は勤労を維持するにあてられた基金の増減如何に関するところであった（(ibid., p. 110.〈同上280頁〉。しかし，富国であることがかならずしも「進歩」を意味するものではない。「シナはヨーロッパのどの地方よりもはるかに富んだ国である。」(ibid., p. 208, p. 255.〈同上第2分冊98-99頁，196頁〉)。「しかしシナはながい間停滞していたように思われる。おそらくはずっと以前にその諸法律や諸制度の性質と両立するかぎりで，富の全量をあますところなく獲得したのであろう。」(ibid., p. 111.〈同上第1分冊282頁〉)(17)。

それはまず第一に，生活資料の生産に示されるところである。水田はもっとも多産な穀物畑よりもはるかに多量の食物を生産する。「一般に年2回，ときには3回の収穫があり，しかも毎回の収穫高が小麦の普通の収穫高よりも一層多い米産諸国では，食物の潤沢さは同一面積のどのような穀産国よりもはるかに大であるにちがいない。したがってこのような国々は人々がはるかに稠密である。」そしてそこでは一般に耕作にはより多くの労働が必要であっても，なお多くの余剰をのこすであろう。それは，他の穀産諸国よりもはるかに大きな剰余が地代として地主に属する，自然的基礎をあたえることになる。(ibid., p. 176, p. 223.〈同上第2分冊38-39頁，131頁〉)。しかも「シナにおける米は，ヨーロッパのどこの小麦よりもはるかに安価である。」(ibid., p. 208.〈同上99頁〉)。安価で

注(15) スミスの中国論については，夙に平野義太郎「アダム・スミスの中国論」（「中央公論」昭和9年1月号，のち「平野義太郎論文集」第2巻——「農業問題と土地変革」〈昭和23年〉——所収）がある。注目すべき文献であるが，その観点は，アダム・スミス体系における中国論というよりはむしろ中国論におけるアダム・スミスという色彩がつよい。

(16) ベンゴールあるいは中国のこのような事情に対して，北アメリカおよび西インド植民地の事情が対比される。ここでは「労働の賃銀ばかりでなく，貨幣の利子も，したがってまた資財の利潤もイングランドよりも高い。」(Wealth of Nations, vol. 1. p. 109.〈前掲邦訳第1分冊277頁〉)。

(17) ただ，ここで中国についていわれている点は，「その地味や気候の性質，ならびに他の国々に対するその位置がゆるすかぎりで，富の全量をあますところもなく獲得した」状態，いわば「富源の終焉」とは異なること，いうまでもない。そこでは「労働の賃銀も，資本の利潤もきわめて低い。」ここにのべられた中国の場合は，獲得された「富の全量は，他の諸法律や諸制度のもとでならば，その地味，気候および位置がゆるすものにははるかに劣るかもしれない」とスミスはいうのである。

あるということは，一つには金銀の価値が高いということの反面でもある。スミスは，これらの国における金銀の需要の大なることを富国たることのもう一つのあらわれとして注目するのである。

「金・銀は富国での方が貧国でよりも，つまり生活資料が充満している国での方が，それが不充分にしか供給されていない国でよりも，一層多量の生活資料と自然に交換されるであろう。」「貧困というものは，富国よりも多くの金・銀を買う余裕もなければ，金・銀に対して一層高価な支払をする余裕もない。それゆえ，こういう金属の価値が，前者での方が後者でよりも高いなどということはあるはずもなかろう。」(ibid., p. 208, p. 255.〈同上98頁，196頁〉)。中国での貴金属の価値はヨーロッパのどの地方におけるよりも高い。

ところで，貴金属の価値が高いということは，より多量の生活資料と交換されるということであり，あるいはまた，そこに含まれる労働量が大であるということであろう。しかし，スミスにしたがえば，「農業においては，富国の労働が必ずしもつねに貧国のそれよりもはるかに生産的であるとはかぎらない。」(ibid., p. 16.〈同上第1分冊103頁〉)。また，金・銀はもともと非常に大きい価値が含まれているので，一般に遠距離の輸送経費も「負担しうるほどのものである。」(ibid., p. 185.〈同上第2分冊54頁〉)。それにもかかわらず，東インド，とりわけ中国やインドスタンにおいて貴金属の価値がヨーロッパにおけるよりもはるかに高かったということは，そこでの，これら貴金属に対する「需要」によるものであると，スミスは説明せざるをえない。そして，そこで，おそらくは特定の人々の手に集中されるであろう過剰の食物こそ，「自然が極く少量しか提供しない特異で稀少な一切の生産物，つまり富者の競争の目的物である貴金属や宝石と交換に，かれらが比較的多量にあたえうるもの」(ibid., p. 223.〈同上131頁〉)であったのである。もちろん，「過剰な食物」は貴金属の流入に見合う根底をなすものであって，直接的には「シナの陶器，モルッカ諸島の香料，ベンゴールの布地」等々であろうが，それに対して貴金属の流入という形をとったということは，ヨーロッパのマニュファクチュア製品に対する需要の欠如，すなわちこれらの商品に対する需要がすでに充分に満されている(=富国)と解されたのである。それと同時に「シナやインドスタンの製造技術や勤勉は，ヨーロッパのどの地方とくらべても劣ってはいるが，はるかに劣っているとは思われない。」そこで大部分の製造品の貨幣価格はヨーロッパのどこでよりも低く，そのうえ発達した内陸航行がその費用を節約させるので，製造品の大部分は実質価格も名目価格もともに低い。かくて「貴金属は，ヨーロッパからインドへ運べば，つねにけたはずれに有利な商品であったし，また現にそういう商品なのである。」(ibid., p. 224.〈同上132-133頁〉)。

このような関係のうえで，スミスは「シナとヨーロッパとにおける労働の貨幣価格の差異は生活資料の貨幣価格の差異よりもなおさら大きい」(ibid., p. 209.〈同上99頁〉)ことを指摘する。それは中国における労働の実質的報酬の低いことによるものである。「労働の実質価格，つまり労働者にあたえられる生活必需品の実際の量は，インドの二大市場であるシナとインドスタンとの双方での

方がヨーロッパの大部分を通じてよりも低い。すなわちそこでの労働者の賃銀は，ヨーロッパの大部分を通じてよりも少量の食物しか購買しないであろうし，また食物の貨幣価格はインドでの方がヨーロッパでよりもはるかに低いから，そこでの労働の貨幣価格は二重の理由によって，ヨーロッパでよりも低いのである。」(ibid., p. 224.〈同上132頁〉)。

かくて，労働の低い報酬なるものが改めて問題とされなければならないことになるであろうが，上述からすれば，「富裕」とみられる諸関係そのもののなかに，すでにその由来はうかがい知られるように思われるのである。

(2) 土地制度

これらの国々においては，蓄積の源泉となるべき「剰余」は，まず農業生産における剰余生産物の地代への転化というかたちであらわれる。この点に関するスミスの論点およびその展開は，注目すべきである。

スミスは指摘する。ヨーロッパにあっては「国王はその領土での最大の土地所有者であるという以上にはほとんど出なかった」(ibid., p. 415.〈同上480頁〉)のであるが，アジア諸国にみられるところは，国王は唯一最高の土地所有者であるということである。「ヨーロッパのどのような地方においても，主権者の収入は主として地租 (land-tax) すなわち地代 (rent) からは生じない。ヨーロッパのすべての大王国では，おそらく主権者の収入の大部分は，究極的には土地の生産物に依存しているのかもしれないが，その依存性は，直接的でもなければ，またそれほど明白でもない。」これに対して「シナ，インドスタンおよびアジアの他のいくつかの政府においては，主権者の収入はほとんど全部が地租すなわち地代から生ずるのであって，それは土地の年々の生産物の増加につれて，増減する。」(ibid., vol., 2. p. 730.〈同上第4分冊70-71頁〉)。「アジアの多くのさまざまの国では，国家が，地代にではなく土地生産物に比例する，地租によって，主として維持されている。シナにおける主権者の収入は，その帝国の一切の土地の生産物の10分の1に存する。」「ベンゴールがイングランドの東インド会社の手に帰してしまうまで，この国のマホメット政府に支払われるのを常としていた地租すなわち地代は生産物の5分の1に達したといわれる。」(ibid., p. 830.〈同上264頁〉)。ここに地代が地租として支払われる，すなわち，地租と地代が一致するということは，主権者がすべての土地の唯一の所有者であったということにほかならない。ここでは土地からの収入は，私的な個人にではなくして，基本的に主権者に，収取される。このような，アジア諸地域における，地代と地租の明確な区別の困難なこと，あるいは，地代と地租の合一は，土地に対する主権者の関係が，代表としての「個人」という意味で私的であり，かつ主権者という意味で公的な関係としてあらわれ，その明確な区別はなしがたいものとなっているということなのであって，クレーダー (L. Krader) は，おそらくスミスがアジア諸地域における主権者の性格として画いたものは，私的な資格におい

てはその土地から地代を，そして公的な資格においては地租を，徴収するという，二重性をもったもの，その統一として理解されるようなものであったのであろうとのべている。[18] 18世紀のヨーロッパの現実においては，この両者は明確に分離され，私的所有 (private ownership) は公的「所有」(public ownership) からは厳密に区別されたものとしてしか，理解されえないところであったのである。

すでに，フランソア・ケネーはその「シナの専制政治」(Despotisme de la Chine, 1767) において，専制君主を「適法的な専制君主」(despote légitime) と「恣意的非適法な専制君主」(despote arbitraire et illégitime) とに区別し，中国の構成は前者に属するとしたあとで，中国における政治的権力は為政者に存することというまでもないが，その諸制度によって統治される人民は公共の・公式の・政治的関係のもとにおかれると同時に，そこでの統治者と被治者の関係は，家族的な・したがって私的な関係であったことを指摘している。[19] スミスはケーネが中国の政治の領域において見いだした，公的であると同時に私的な関係を，土地所有関係における公的で同時に私的な関係によって，基礎づけるとともに，単に中国のみならず，広くアジア諸地域および古代エジプトをもそれに包含せしめることによって，それを定式化したというべきであろう。

すでに，フランソア・ベルニエはその「旅行記」(Voyage de Françaois Bernier, Docteur en Medicine de la Faculté de Montpellier, contenant la Description des Etats du Grand Mogol, de l'Hindoustan, du Royaume de Kachemire, etc.) において，国王がその王国内のすべての土地の唯一の所有者であることに，注意の眼をむけているのであるが，[20] それはのちに，マルクスのエンゲルス宛1853年6月2日付の書簡において，ベルニエを引用しながら，東洋 (Orient) の全現象の基本形態を，私的土地所有が存在しないこと (kein Privatgrundeigentum existiert) のなかに見出し，「これが東洋の天国にいたる鍵にほかならない」とのべる，その点につながることになるのである。[21]

注(18) Lawrence Krader; The Asiatic Mode of Production, Assen, 1975, p. 40.

(19) Auguste Oncken; Œuvres Economiques et Philosophiques de François Quesnay, Francfort et Paris, 1888, p. 564. また「統治者は大家族の長とみなされている」(p. 628)。

(20) スミス蔵書中に見出されるベルニエの「旅行記」は1699年版であるが (James Bonar; A Catalogue of the Library of Adam Smith, 2nd ed. 1932, p. 26)，ここでは便宜上差当り，英訳本 Travels in the Mogul Empire, A. D. 1656-1668, by François Bernier, a revised and improved edition based upon Irving Brock's Translation, by Archibold Constable, Westminster, 1891. (p. 220) によった。なお，クレーダーは「専制政府と国王による独占的土地所有との結びつき，ならびにこれらの事実が結果として農業を破滅にいたらしめたことの指摘は，ベルニエの貢献である」とのべている。(L. Krader; op. cit., p. 31)。

(21) Marx・Engels Werke, Dietz Verlag, Bd. 28. 1963. S. 254. そして，1858年の「資本制生産に先行する諸形態」を経て，1859年「経済学批判序言」における「アジア的生産様式」の一応の定式化。また「地代の取得は土地所有が実現される経済的形態である」が，「その場合，この所有者はアジアやエジプトなどでのように，共同体 (Gemeinwesen) を代表する個人であってもよい……。」(Marx; Das Kapital, Volksausgabe, besorgt vom M-E-L-Institute, Bd. 3, Moskau, 1934, S. 684.)「もし，かれら（直接生産者）に直接に土地所有者として相対すると同時に主権者として相対するものが，私的土地所有者ではなくて，アジアでのように国家であれば，地代と租税とは一致する。または，むしろ，その場合には地代のこの形態と異なる租税は存在しないのである。このような事情のもとでは，従属関係は，政治的にも，経済的にも，この国家に対する臣従関係に共通な形態以上に苛酷な形態をとる必要はない。国家はここでは最高の領主である。主権はここでは国家的規模で集中された土地所有である。しかしそのかわりにこの場合は私的土地所有は存在しない。もっとも，土地の私的な占有 (Besitz) や用益 (Nutznießung)，ならびに公的な占有や用益も存在するのではあるが。」(ibid., S. 841)。

ところで，スミスは，大土地所有者，とくに旧い貴族的・封建的大土地所有者は土地の耕作や改良に注意を払うということはめったにない点に，これら大土地所有者の基本的姿勢を見いだしている（ibid., vol. 1, p. 385.〈同上第2分冊433頁〉）。これに対して，主権者の収入が主として地租＝地代からあげられているようなアジアの多くのさまざまの国にあっては，「この地代は必然的に生産物の量と価値とに比例し，」（ibid., vol. 2, p. 637.〈同上第3分冊410頁〉），したがって，「かれら自身の収入の増加または減少は農業の繁栄または衰微に依存していた」ので，「これらの主権者達は当然に農業の利害に特別の注意を払っていた」（ibid., p. 683.〈同上496頁〉）ことが，これら主権者（＝土地所有者）の農業へのかかわりあい方として，スミスの特記するところであった。スミスが，これら主権者の土地の改良および耕作のために払った関心としてあげているところは，灌漑・治水土木事業であり，道路・運河の修築である。

古代エジプトおよびインドスタン「両国の政府は農業の利益に特別の注意を払っていた。ナイル川の水を適正に配水するために古代エジプトの主権者達が建設した土木工事は古代には有名なものであったし，そのうちのあるものの荒廃した遺跡は，なお旅行者の驚歎するところである。ガンジス川その他の多くの河川の水を適正に配水するために古代インドスタンの主権者達が建設した同種の工事は，エジプトのそれほどには名高くはないけれども，等しく偉大なものであったように思われる。したがって両国は時折食料の欠乏に陥りはしたけれども，極めて豊饒なことで有名であった。両国は極度に人口稠密であったけれども，なお平年作の年でも，その隣国へ多量の穀物を輸出することもできたのである。」（ibid., pp. 681-682.〈同上493頁〉）。そして，水の不足はたちまちに飢饉につながるおそれなしとはいいえない。「米産国では，作物は非常に湿潤な土壌を必要とするばかりでなく，その成育の一定期間中はそれを水のなかにおかなければならないのであるから，旱魃の影響ははるかにおそろしい。それにもかかわらず，このような国々でさえ，もし政府が自由貿易を許しておくならば，旱魃が必然的に飢饉を惹起するほど普遍化することはおそらく滅多にあるまい。（しかし）数年前のベンゴールの旱魃は，おそらく非常な食料払底をひきおこしたものであったのだろう。」（ibid., vol. 1, p. 527.〈同上第3分冊195頁〉）。

さらに，主権者の収入が依存している「生産物をできるだけ大きくするためにも，またその価値をできるだけ多くするためにも，できるだけ広大な市場を獲得することが必要であり，したがってまた，その国のありとあらゆる地方の間におけるもっとも自由でもっとも容易な，しかももっとも安上りの交通機関を確立することが必要なのであるが，このことは最良の道路と最良の運河とによってのみできることなのである。」「シナやアジアの他のいくつかの政府においては，行政権力が公道の改修と航行可能な運河の維持との双方の責任を負っている。各州の知事にあたえられた指令には，つねにこれらの目的が推奨されているのであって，宮廷が知事の行動を判断する場合には，かれが指令のこの部分にどれだけの注意を払ったかということが重視される，といわれている。した

がって公共の政策のこの部門には，これらのすべての国々で非常な注意が払われているが，とりわけシナではそうだといわれており，そこでは公道が，なおそれ以上に航行可能の運河が，ヨーロッパで知られているあらゆる同種のものをはるかに凌駕している，と主張されている。」(ibid., p. 730, p. 729. 〈同上第4分冊71頁，69-70頁〉[22]。

かくて，スミスは，中国およびアジアの他の多くの国における，これらの灌漑・治水土木事業，道路・運河の建設・維持は，これらの国々の政府の管掌する主要な行政権の機能であり，それがこれらの国々の政府形態の，政府権力の一つの基礎をなしていることに，その根底をなす土地制度の解明とならんで，アジア諸地域の分析の重要な手掛りを見出しているもの，といっていいであろう。

このような基本構成にもとづいて，そこでは農業の優遇，農民の尊重が当然に考えられるところである。スミスはこの点に関し，中国の政策は，他のすべての産業よりも農業を優遇しているとのべ，ベルの「旅行記」(Travels from St. Petersburg in Russia to diverse parts of Asia, Glasgow, 1763) を引用して，中国における商業蔑視の観念を，ヨーロッパ諸国民の「政治経済学」(political economy) におけるそれと対比しているのである。(ibid., pp. 679-680. 〈同上第3分冊490頁〉[23])。それにもかかわらず，そこでは，「所有として (in property) であれ，賃借として (in lease) であれ，ほんの零細な地片 (little bit of land) を獲得すること」が各人の懐いている「大野心」(great ambition) であったのである。(ibid., 〈同上〉)。

それとならんで，主権者にとっては，土地所有は農業生産手段としての土地の所有ではない。その収入は主として不生産的労働の雇用にむけられ，あるいは貴金属や奢侈品に対する需要を構成する。スミスは書いている。「シナやインドスタンにおける高官の従者は，ヨーロッパにおいて最も富んだ臣民のそれよりも，はるかに多数で，しかも華美である。」(ibid., vol. 1, p. 223. 〈同上第2分冊131頁〉)。そして，これはスミスが大土地所有者一般について観察し，指摘しているところ，すなわち「このような人は，その境遇からいっても，自然，自分がほとんど必要ともしない利潤などに注意を払うよりは，自分の道楽を満足させるような単なる外見に注意を払う気になる。自分の衣服・什器・家屋および家具を優雅なものにするということは，かれが幼少のころからの習慣として多少とも心にかけてきたことがらである」(ibid., pp. pp. 385-386. 〈同上434頁〉) といった点に，自ら通ず

注(22) スミスはこの箇所で，ベルニエに言及し，「ベルニエがインドスタンにおけるこの種の土木産業のあるものについて書いている報告は，かれよりも奇異なことを好む他の旅行者達が，従来それらについて報告してきたところに比べると，はるかに及ばない」とのべている。ここでスミスは，単に奇異をあさるにすぎない俗流旅行者達を批判しているのである。グラスゴー版の「国富論」はここに註を付して「ベルニエはこの叙述を立証するような説明をあたえてはいない」(ibid., vol. 2, p. 730, n. 11) と記している。キャナンの註はベルニエの「旅行記」のなかから「大きな川には普通橋がない」という箇所を引用している。(Wealth of Nations, ed. by E. Cannan, 6th ed. London 1950. vol. 2, p. 221, n. 42. ベルニエのこの叙述については，前掲英訳本 p. 380 をみよ。) なお，道路と運河の建設・維持については，Wealth of Nations, Glasgow edition, vol. 2, p. 838. 〈前掲邦訳第4分冊264頁〉) をも。

(23) なお，「シナやインドスタンの田舎の労働者は，その身分においても，賃銀においても，工匠や製造業の大部分のもののそれよりまさっているといわれる。」(ibid., vol. 1, p. 144 〈同上第1分冊340頁〉)。

るものなのであろう。しかも，収税吏や差配人の怠慢や不正や強奪による主権者の損失がこれに加わる。「現物で支払われた公共的収入は，収税吏の不始末のおかげで甚だしくわざわいされ，人民から徴収されたものの極く僅かな部分しか君主の宝庫にとどかないということになるであろう。とはいえ，シナの公共的収入の若干部分は，このような仕方で支払われているということである。シナの官吏(Mandarin) その他の収税吏は，疑いもなく，貨幣によるどのような支払いよりもはるかに不正を働きやすいこの支払慣行を継続させておくことに自分達の利益を見いだすのであろう。」(ibid., vol. 2, p. 839.〈同上第4分冊266頁〉)。

さらに，生命財産が十分に保証されている国々にくらべて，「人々が上長の暴力をたえずおそれているような不幸な国々では，人々は自分達がいつもさらされていると思うなんらかの災厄におびやかされた場合，自分の資財をどこか安全な場所に持運べるように，つねに手許に置いておくために，その大部分を埋蔵したしたり，隠匿したりすることがしばしばある。こういうことはトルコやインドスタンでは普通おこなわれているといわれており，またアジアの他の大抵の国々でもそうであろうと思われる。」(ibid., vol. 1, p. 285.〈同上第2分冊247-248頁〉)。このような資財の蓄蔵は，その資本への転化をさまたげることというまでもない。しかも，富者すなわち大資本の所有者こそ生命・財産の十分な安全を享受しているとはいえ，貧者すなわち小資本の所有者はほとんどそのような保障をうけることなく，「それどころか，名を正義にかりて，いつ下級官吏 (inferior mandarin) の略奪や略取に見舞われるかもしれない，」このような国では，「その国内でおこなわれる種々の事業部門に使用されている資財の量は，その事業の性質や大きさが許容しうるものに到底匹敵しうるはずがない。各種々の部門で貧者に対する抑圧は必然的に富者の独占を確立し，富者は全事業を自分の一手におさめ，それによって極めて大きな利潤を獲得しうるであろう。シナにおける貨幣の普通の利子は12%といわれており，資財の通常の利潤もこの高い利子をあたえるに足りるものにちがいないのである。」(ibid., p. 112,〈同上第1分冊282-283頁〉)。一方でこのような高率の利潤を可能にする資本の偏在と「不足」は，前期的資本の跳躍の場をつくるものであろう。「ベンゴールでは貨幣はしばしば40%，50%，60%で農民に貸付られ，しかもその支払は次期の収穫が担保になっている。」(ibid., p. 111.〈同上280-281頁〉)。

スミスは上述のような土地制度を根底において，そこに構築される官吏専制支配と，それと結びつく前期的資本の高利潤，法外の高利が，産業利潤の増加・蓄積をさまたげ，直接生産者を窮乏においやっている事実を，明らかに示しているのである。零細な農民は，まさに生活維持のために，すでにみたように，零細な一片の耕地さえも拡張しようと努めざるをえないのであるが，たとえ，「その借地はきわめて妥当な条件でなされ」(ibid., vol., 2, p. 680.〈同上第3分冊490頁〉) ているとはいっても，そこになんらかの剰余をのこしうるほどのものではなかろう。一般的にいって，「こういう利子を支払いうるような利潤は，地主の地代のほとんど全部を食いつくしてしまうにちがいない

し，またこういう巨額の高利は高利で，これらの利潤の大部分を食いつくしてしまうにちがいないのである。」(ibid., vol. 1, p. 111.〈同上第1分冊281頁〉) それでも「シナでは耕作者の状態は工匠のそれよりもまさっている。」(ibid., vol. 2, p. 679.〈同上第3分冊490頁〉)。

かくて，独立生産者とくに独立自営の農民層の形成は阻害され，国内市場の拡大に資する製造業の発達はひくくおさえられざるをえない。

スミスは，中国はながい間停滞的であったとする叙述にひきつづいて，つぎのように書いているのである。「すべての旅行者の説明は，他の多くの点で矛盾しているけれども，シナにおける労働の低賃銀，つまり労働者が家族を養育することの困難性という点については一致している。もしかれが終日土地を堀りおこすことによって，その夕方に少量の米を購買するだけのものを獲得することができるならば，かれは満足なのである。工匠たちの状態は，おそらくなおさらひどい。かれらはヨーロッパでのように，自分たちの仕事場で手をつかねてその顧客から声がかかるのを待たずに，それぞれの生業の道具類をもって，いわば乞食のように御用をききながらたえず街頭を走りまわっているのである。[24] シナの比較的下層階級の人民の貧困は，ヨーロッパで最も乞食のような諸国民のそれをはるかにこえている。」(ibid., p. 89.〈同上第1分冊235-236頁〉)。これを，さきにあげた，社会成員の大部分が十分に生活しうるだけの分け前にあずかることをもって，社会が「隆盛であり，幸福である」というべきであり，またそれを以て社会は「公正」であるとなすべきであるという主張(前掲注5) と対比するならば，スミスの意図はこれを十分に知ることができるであろう。

(3) 外国貿易

スミスにしたがえば，隣国民の富は二つの面で自国の市場の開拓に役立つとされる。その一つは自国の製品に対する購買力となるからである。「隣国民の富」は「かれらがわれわれとより大きな価値を交換することを可能にし，またわが国の産業の直接の生産物かまたはこの生産物で購買されるあらゆるもののいずれかに対して，より良き市場を提供することをも可能にするにちがいない。」(ibid., p. 494.〈同上第3分冊131頁〉)。その二は富国の製造業者が自国の製造業者に対する競争力となることによって，ひいては人民大衆の利益となり，それが国内市場の拡大に資するであろうからである。「富国の製造業者は，疑いもなくその隣国の製造業者にとって極めて危険な競争者であろう。それにもかかわらず，まさにこの競争こそ，その人民大衆にとっては利益なのであって，しかも，かれらはこのような国民の多大の費消が他のあらゆる方法で提供してくれる良い市場のおかげで利益を得るのである。」(ibid.,〈同上132頁〉)。そこで，「外国貿易によって自国を富まそうとする国民に

注(24) ここの出典はケネーによるとされている。「工匠たち (artisans) は顧客をもとめて (chercher pratique) 朝から晩まで町を走りまわっている。」(A. Oncken; op. cit., p. 581.) (Wealth of Nations, Glasgow ed., vol. 1, p. 89, n. 20. ibid., ed. by Cannan, vol. 1, p. 74, n. 27.)

とっては，その隣国民のすべてが富んで勤勉な商業国民である場合，その目的を達成する見込みが最も多い」(ibid., p. 495.〈同上〉）ということになるであろう。それは，自国で需要のない，または余剰の生産物に対して外国市場があり，同時に隣国の製造業の生産物に対して自国内に需要が存するということによるものである。

これに対して，「放浪する未開人や貧しい野蛮人に四方八方をとりかこまれている大国民は，疑いもなく，自国の土地の耕作や自国内商業によって富を獲得するが，外国貿易によってはそうすることはできないであろう。古代エジプト人や近代シナ人がかれらの巨大な富を獲得したのは，こういう方法によってであった。」(ibid.,〈同上132-133頁〉)。その根拠の一つとして，スミスは中国の国内市場の広さをあげるのである。すなわち，中国の広大な面積をもつ国土，多数にのぼる住民，変化に富む気候，したがってそこでの各種の地方物産，そして各地方間の発達した道路や運河による流通，「すべてこういった事情は，この国の国内市場を非常に広大なものにし，それだけで極めて大きな製造業を維持し，分業を著しく細分化させる余地をあたえるに足りるものであったのである。シナの国内市場は，おそらくはその広さにおいて，ヨーロッパのさまざまの国のすべての市場をあわせたものにおとらぬであろう。」(ibid., vol. 2, pp. 680-681.〈同上第3分冊491-492頁〉[25]。またインドについても同様のことがいわれる。「古代エジプトおよびインドスタン両国では，内陸航行の便が多く，それが外国市場の限定されている状態をある程度償なっていたのであって，この内陸航行の便はこれらの国々のあらゆる地域の生産物のあらゆる部分に対し，最も有利な仕方で，国内市場の全領域を開放したのである。そのうえ，インドスタンの広大な面積は，この国の国内市場を極めて広大なものにし，各種多様の製造業を維持するに十分なものにしたのである。」(ibid., p. 682.〈同上495頁〉[26])。

広大な面積と多様な気候，それに加えて交通手段の発達は，素材補塡を容易にし，また生産者の競争による生産物価格の引下げ，諸地方での主産地の形成，社会的分業の発達は，「諸法律や諸制度」のもとでおこないうる限りでの，国内市場の拡大をもたらすであろう。しかし，社会的分業の発達，商品生産の進展は，農民層分解をおしすすめ，独立生産者を解体し，やがて「諸法律や諸制度」の枠をこえることを余儀なくするに至るかもしれない。そして外国貿易がこのような市場拡大への刺戟をあたえることもあるであろう。しかし，外国貿易が市場の開拓に貢献するというのは，自国内における余剰の生産物の生産と同時に，それと見合う外国の生産物に対して自国内に購買力

注(25) ケネーはつぎのようにのべている。「歴史家はシナの内陸において営まれている商業はヨーロッパのそれと比較にならぬほど大きいと言っている。」(A. Oncken; ibid., p. 603)。

(26) また，「ベンゴールでは，ガンジス川その他いくつかの大河が，エジプトにおけるナイル川と同様に，多数の航行可能な水路を形成している。また，シナの東部諸省でも，いくつかの大河が，そのさまざまの支流によって多数の水路を形成し，またそれが互いに連絡しあうことによって，ナイル川またはガンジス川のいずれよりも，否おそらくはこの両者を一緒にしたよりも，はるかに広大な内陸航行を可能にしている。古代エジプト人も，またインド人も，さらにはシナ人も，そのすべてが外国貿易を奨励せずに，かれらの偉大な富裕をこの内陸航行からひき出していたように思われる。」(Wealth of Nations, Glasgow ed. vol. 1, p.35.〈前掲第1分冊130頁〉)。

が存在しているということであろう。「戦争や征服の場合をのぞけば，外国財貨というものは，直接にか，または二回以上別々の交換の後にかのいずれにせよ，国内で生産されたなにものかと交換されることなしにはけっして獲得できないからである。」(ibid., vol. 1, p. 369, 〈同上第2分冊407頁〉)。また「国内産業の余剰生産物で購買された外国財貨が国内市場の需要をこえる場合には，この余剰部分は再び海外へ送られ，国内でもっとも需要されるなにものかと交換されなければならない。」この余剰部分が「海外に送られ，国内でもっと需要されるなにものかと交換されえないならば，その輸入は直ちに終熄せざるをえないし，」そうなればこの余剰部分を「年々購買するに用いられる財貨の調製に使用される，すべての住民の生産的労働もまた終熄せざるをえない。」(ibid., pp. 372-373. 〈同上413-414〉)。外国貿易による市場の開拓は，このような意味で，国内市場の拡大につながるものであったといっていいであろう。このような点からするならば，限定された外国市場のもとで，広大な国内市場に支えられて，各種の製造業が維持され，分業を細分化させたといっても，それは実は，外国商品に対する国内の購買力を欠如したうえで，あたえられ，限定された国内市場のもとで維持された生産の水準および構造についていわれていたのである。

ところで，スミスは，中国やインドが広大な国内市場と発達した交通手段にもとづいて各種の製造業を形成・維持し，富を獲得した反面，外国貿易を軽視し，あるいは蔑視していたことを，指摘している。「シナ人は外国貿易をあまり尊重しない。」「シナ人は，日本を除き，自分自身で，しかも自国の船腹によって，ほとんど全く外国貿易を営んでいないし，たとえ外国人の船舶の入港を許すにしてもその王国の僅か一，二の港にすぎない。それゆえどう見ても，シナにおける外国貿易は，自国船によるにせよ，外国船によるにせよ，もっと自由が許されたなら自然に拡張されるであろうよりも，はるかに狭隘な範囲に局限されているのである。」(ibid., vol. 2, p. 680. 〈同上第3分冊490頁〉)[27]。そしてスミスは，このような外国貿易に対する反感は，たとえば古代エジプトやインドにみられるように，時として宗教上の迷信にもとづくものであるとしている。「古代エジプト人は迷信的に非常に海を嫌っていたし，またジェントゥー (Gentoo) の宗教はその信者達が水のうえで火を点すことを許さず，したがって水の上でどのような食物も調理することも許さないから，事実上この宗教はかれらの遠洋航海を一切禁止しているわけである。エジプト人もインド人も自分達の余剰生産物の輸出については，ほとんど全く他の諸国民の海運に依存したにちがいないし，そしてこの依存性は市場を限定したにちがいないから，余剰生産物の増加をも阻害したにちがいない。」(ibid., p. 683. 〈同上494頁〉)。「古代エジプト人は海に対して迷信的な反感をもっていたし，これとほぼ同じ種類の迷信はインド人の間にもひろがっており，またシナ人が外国貿易で秀でていたなどということはあったためしもない。」(ibid., vol. 1, p. 367. 〈同上第2分冊403頁〉)。

注(27) また ibid., p. 495. (同上第3分冊133頁)「古代エジプト人は外国貿易をなおざりにしたといわれており，また近代シナ人はそれを極度に軽蔑し，それに法律上の相当な保護をほとんど与えようとしなかったことはよく知られている。」

しかしながら，外国貿易に対する軽侮や反感が，たとえ宗教的迷信にもとづくものであったとしても，そこで統治者がその権力権造の基盤維持のためにはからねばならなかったことは，スミスが適切にものべているように，「外国船舶が一，二の海港にしか入港することを許さぬような国は，別個の諸法律や諸制度のもとでおこなえるかもしれぬものと同一量の事業をおこなうことはできない」(ibid., vol. 1, p. 112.〈同上第1分冊282頁〉ということであったのであろう。これらの諸国から「つねに外国人たちによって輸出されていたように思われる」余剰生産物の大部分は，かならずしも一般的需要を満しうる商品ではなく，時には国内の需要の限定された特化した商品であり，かつ「かれらは，それと交換に，そこで需要される他のあるもの，しばしば金・銀をあたえていたのである。」(ibid., p. 376.〈同上第2分冊403頁〉)。それはすでにみたごとく，ヨーロッパのマニュファクチュア製品に対する需要の欠如をものがたるものであろう。そして，これらの金・銀は，あるいは退蔵されあるいは奢侈品に転化して，国内の一般的勤労（industry）を刺激し促進するためには用いられることすくなかったのである。このようにして，中国乃至はインドにおける，「広大な国内市場」にもとづく各種製造業の発達・維持は，実は，それ自体「停滞」の状態を示すものであったというべきであろう。(28)

3. 衰退の論理

以上に見たごとく，外国貿易は製造業に刺戟をあたえ，国内市場の拡大に資するものであったが，スミスにしたがえば，停滞的なインドを衰退に導いたものもまた，外国貿易であった。スミスが東インドのベンゴールおよび他の二，三のイングランドの定住地の現況にほぼ近いものとして画いた状態は，さきに掲げたごとくであるが，スミスはそれにつづいて「北アメリカを保護し，統治する大ブリテンの憲法の真精神と，東インドで圧制を事とし，横柄に振まっている商事会社（mercantile company）のそれとの差異を例証するものとしては，おそらくこれらの国の状態の差異以上のものはなかろう」(ibid., vol. 1, p. 91.〈同上第1分冊239頁〉）とのべているのである。

ここでの問題は，商業的独占と主権との結合という点に存するもののごとくである。

スミスは，全世界が東インド商業から獲られる潜在的利得は莫大なものであろうと判断しているのであって，「東インドは，ヨーロッパの製造品とアメリカの金銀その他若干の生産物との双方に

注(28)「この大きな国内市場に世界の残余の全外国貿易を加えた一層広大な外国貿易が，とりわけそのかなりの部分がシナの船舶で営まれる場合，シナの製造業をはなはだしく発達させ，その製造業の生産諸力を著しく改善することは，ほとんど間違いのないところである。航路がさらに拡大されれば，シナ人は世界のさまざまの地方のすべてにおいておこなわれている技術や産業の他の諸々の改善はもとより，他の国々で利用されているありとあらゆる機械類を自分で使用したり製作したりする技術を当然学ぶことになるであろう。かれらの現在のやり方においては，日本人の実例によって自らを改善する以外，かれらは他のどの国民の実例によってそうする機会もほとんどないのである。」(ibid., vol. 2, p. 681.〈同上第3分冊492頁〉)。

対して，ヨーロッパとアメリカの両者を一緒にしたより以上に広大な市場を提供しているのである」(ibid., vol. 2, p. 632.〈同上第3分冊401頁〉) という。東インド商業への参加が自由であったとすれば，スミスが「国富論」第3編において展開した論理のもとでは，それはおそらく，インド自体の国内市場の開発に資することとなった筈である。しかし，このような機会はあたえられなかったのみならず，競争の欠如は取引上の失策や不正をおおいかくすものであった。独占は「特別利潤」ばかりでなく，「かほどの大会社の事務管理とは不可分な，詐欺や濫用から必ず惹起されたにちがいない一切の異常な浪費」をも生み出す，とスミスは書いているのである。(ibid., p. 681.〈同上399頁〉)。

商業的独占に対するこの種の批判は，東インド会社が支配的役割を演ずるにいたるはるか以前からおこなわれていたところであったが，それに対してスミスの論点は，独占と行政権との結合という点をとくに重視したところにあった。アメリカの場合と異なって，アフリカや東インドでは，原住民を追いのけ，本来の住民の土地の大部分にヨーロッパ人の栽植地をひろげていくということは，アメリカの場合よりも一層困難であった」のであるが，そのうえそこでの全商業が一つの排他的な会社によって掌握されており，「植民地はその必要とする一切のヨーロッパ財貨をこの会社から買わざるをえず，またその余剰生産物の全部をこの会社に売らざるをえなくなっていた」(ibid., p. 575.〈同上297頁〉) という事情のもとで，「排他的な会社の精神は，新植民地の成長にとっては不都合であって」おそらくはそれが「東インドの植民地が僅かしか進歩しなかったことの主要原因であった」(ibid., pp. 634-635.〈同上405頁〉) とスミスは認めているのである。

もっとも，スミスは東インド会社がその排他的特権を弁護するために展開した「自然的独占」の主張については，なにほどかの是認をしているのであって，「商人の会社が，その危険負担と費用とにおいて，ある遠隔地の野蛮民族との間の新しい貿易に着手する場合，(中略) 一定年数の間その貿易の独占権を授与してやっても不合理ではなかろう」(ibid., p. 754.〈同上第4分冊114頁〉) とのべている。そして，インドスタンの「温和でやさしい人民」の間でさえも，イングランドおよびフランスの東インド会社が「最初の保塁の建設を許された」のも，「自分達の生命や財産を暴力からまもる」ために，認めらるべきであったとしているのである。(ibid., p. 732.〈同上74頁〉)。しかしながら，その一定期間が過ぎれば独占権は当然終熄させらるべきものであるし，また保塁や守備隊も，もし設置しておく必要がみとめられれば，政府の手におさめらるべきであるということになる。

スミスの考えは，独占はよくないものである，しかしそれが行政権と結びついたときには，もっと悪くなるというのである。「商人の会社というものは，自分が主権者になってしまってからでさえ，主権者としての自覚をもつことができないように思われる。」(ibid., vol. 2, p. 637.〈同上第3分冊410頁〉)。かれらは，主権者の性格というものは商人の性格の一付属物にすぎず，商人の性格に奉仕すべきなにものかであるという「奇怪な不条理」にもとづいて，「統治を独占の利益に奉仕させ，したがってまたこの国の余剰生産物のすくなくともある部分の自然的増加をさまたげ，それをこの

会社の需要に応ずるに足りるぎりぎりのところにしてしまう傾向をもっているのである。」(ibid., p. 638.〈同上412頁〉)。スミスの立場からすれば，主権者にとっては，自国の生産物に最も広大な市場を開放し，商業のもっとも完全な自由をみとめることこそが利益であるということになる。「東インド会社を主権者として考察した場合，その利益は，インドという自分の領土へ送られるヨーロッパの財貨がそこでできるだけ安く売られ，またそこから持ち出されるインドの財貨がヨーロッパでできるだけ良い価格をもたらす，つまりできるだけ高く売られるということである。ところが商人としてのかれらの利益はこれとは逆である。主権者としてならば，この会社の利益は自分が統治する国の利益とまったく同一である。ところが商人としてならば，この会社の利益はこの国の利益とは正反対のものなのである。」(ibid., p. 638.〈同上411頁〉)。私的独占が地域的な主権者となることによって，国内の生産の正常な様式は転倒せしめられざるをえない。ここでは商人は自分に奉仕すべきなにものかである主権者という性格があるからこそ，「自分達はインドでより安値に買い，ひいてはヨーロッパでよりよい利潤をあげて売ることができるのだと考えている。この目的のために，かれらは自分達の支配下にある国々の市場から一切の競争者をできるだけしめ出し，したがって少なくともこれらの国の剰余生産物のある部分を，自分自身の需要を辛うじて充足するに足りるところまで，すなわち自分達が妥当と考える利潤をあげてヨーロッパで売れると期待しうるところまで，減少させようとつとめるのである。」(ibid., pp. 637-638.〈同上410-411頁〉)。これに関してスミスは，東インド会社の在庫が大きいときには，耕作者はそのケシ畑を破棄することを命ぜられ，反対にその在庫が少ないときにはケシを栽培するために，植付けられている稲がすきかえされたという事実をあげている。(ibid., p. 636.〈同上408頁〉)。スミスは，1770年代初期のベンゴールの旱魃に当って，「東インド会社の社員たちが米穀貿易に課した若干の不都合な規制や無分別な制限こそ，おそらく，この食料払底を転じて飢饉たらしめるのに与って力のあったものであった」(ibid., vol: 1, p. 527.〈同上第3分冊195頁〉）としているのである。ベンゴールの人口の6分の1は1770—1772年の飢饉で死んだ。(29)

主権者なるものは，本来，被統治者の福祉と，したがってかれらの経済的改善と行動を共にすべきものなのであった。しかし，商人の会社が主権者となった場合には，主権者たるの側面が商人としての利益をあげることのために，利用されてしまうのである。スミスは「こういう商事会社の株主の大部分は，不可抗的な道徳的原因から，その臣民の幸不幸について，またその領土の改良や荒廃について，さらにその行政の栄辱について全く無関心である」(ibid., p. 752.〈同上第4分冊110頁〉)といい，「排他的な商事会社の統治というものは，およそどのような国にとっても，おそらくは最悪の統治である」(ibid., p. 570.〈同上第3分冊286頁〉）という評価をするのである。

注(29) William J. Barber; British Economic Thought and India, 1600-1858. A Study in the History of Development Economics, Oxford, 1975, p. 96.

かくて，競争への健全な刺戟は抑圧され，資源は海外へ流出し，剰余がインド経済に再投資される見透しは枯渇せざるをえない。

もっとも，スミスが非難しているのは東インド会社の統治形態なのであって，特定の個人についてなされているのではない。「わたくしは東インド会社の使用人たちの一般的人格になにか忌わしい非難を投げかけようとするつもりはないし，まして特定の人物について兎や角いうつもりはない。わたくしが咎めたいのは，その統治の制度や，かれらがおかれているその地位でこそあれ，そこで行動した人々の人格ではない。」(ibid., p. 641.〈同上417-418頁〉)。かれらの多くは，責務として人々の福祉に純真な関心をもった，尊敬すべき人達である。問題は制度自体にあるのであって，規制されることなき私的独占の手中にある行政権は，矛盾に満ちた利害関係を内包することにならざるをえなかったのである。スミスは，東インド会社が獲得した領土および豊富な収入の源泉は「国王の，いいかえれば大ブリランの国家および国民の，疑問の余地なき権利である」というところに (ibid., p. 945.〈同上第5分冊81頁〉)，その進路を見出しているごとくである。

かくて，スミスが追求した「衰退の論理」はほかならぬ重商主義批判の一側面であったのである。

〔附　記〕 本稿は「国富論」を中心として，アダム・スミスの中国・インド論に関する論点を整理したに止まる。スミスの中国・インド論といいうるためには，更にその思想史的系譜および古典派経済学におけるその継承についての研究によって，そこにおけるスミスの位置づけが果されなければならないが，それは他日を期したい。

(名誉教授)